雨のち晴天 第二七回横浜港メーデー

第二七回横浜港メーデー・雨のち晴天四〇〇名以上の参加で実施。

今年は一〇連休という事もあり、天気状況が悪いとの予報の中で、どの程度の参加が集まるか心配されましたが、各単組の取組みもあり、家族も含め全体で四〇〇名以上の参加者で集うメーデーとなりました。

天気予報通り、前日の夜から当日、太陽が昇る時間帯まで雨が降りしきるなか、一日の天気予報も午前中は小雨が降るとの予報。もし雨が降りしきっている場合は、ステージのプラットホームは屋根が付いているものの、参集された方々が雨で濡れて大変ではないかと心配されました。

しかし、会場のスタンバイ集合時間帯である七時半頃には小雨の雨がやみ、開会時間の九時前には太陽も見える青空となり、一安心のもと、第二七回横浜港メーデーが進行されました。

温度はそれほど上昇せず、水で冷やしたお茶、コーヒー、ビールなどが完売せず、飲み物が残る珍現象がありました。

メーデー会場は、渡辺副実行委員長の司会で進められ、東海実行委員長より現在も闘われている一九春闘の状況と日本港運協会に対する怒りが述べられた後、全国港湾糸谷中央執行委員長より、日本港運協会の誠意の無い対応に対し、今後も組合員と共に奮闘し、組合員全体で今春闘を頑張り抜くことが述べられました。来賓として労働センター、神奈川交運労協、国民春闘共闘、港湾局長等よりの挨拶をいただくと共に、政党より立憲民主党、日本共産党、社会民主党の代表者より挨拶をいただきました。

メーデースローガンと、一九春闘を闘い抜くことを決意するメーデー宣言が大きな拍手のもと採択され、奥村副実行委員長よりパレード行進指揮の説明が行われた後、三隊編成によるデモ行進がプラットホーム～万国橋～海岸通り～大桟橋入口～山下公園前を通り終点である山下埠頭まで、晴れ上がった晴天のもとデモ隊列を崩さず、行進が行われた。

（全横浜港湾・渡邉書記長）

リレー随筆
～放射性物質も体外へ？～

もう、随筆担当がまわってきました。教宣委員・全倉運の瀬川です。

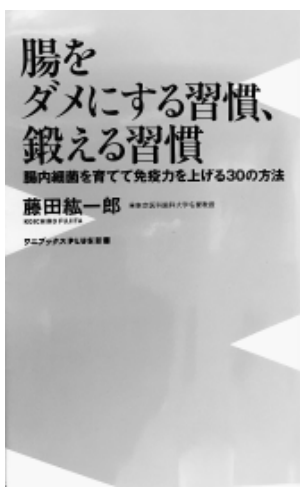
最近、体調が芳しくなく、おなかの調子も良くない時が続いております。健康診断（簡易）の結果だけ見ると悪そうには見えないのですが、体重が九十四㌔もあるので、良いはずがありません。運動をする時間が無いのであれば食生活を変えるしかないと奮起し、大好きなお菓子を制限することにいたしました。（泣）

本屋に行き、健康に関するコーナーで「腸をダメにする習慣、鍛える習慣」と言う本を見つけました。腸の健康があなたの寿命を決めると書かれております。腸は免疫の七十％を担うそうです。そして、お酒の呑める人に休肝日は必要ない（呑み過ぎはダメです）。タバコもやめる必要はありません（吸わないに越した事はない？）等の事も書かれており、呑まない・吸わないを我慢（ストレス）すると腸内細菌のバランスを乱しNK細胞（ばい菌やガンを攻撃する）機能が弱まってしまうそうです。それよりも、腸を元気にする食べ物を摂取し、「あるがまま」に生きたいもんです。

腸内細菌が喜ぶ食べ物は日本の伝統食に多いいそうで、特におススメは味噌です。スーパー等に売っている味噌は熱処理がされており効果は期待できません。しかし今の時代はNETで注文できる為、「麹菌の生きた味噌」を手に入れるのも容易になりました。これで味噌汁を作り納豆を入れ、「納豆汁」にすると効果は凄いそうです。余談ですが、味噌は放射線（被ばく）で傷ついた細胞をも再生し、放射性物質も体外に排出するそうです。ここでは書ききれないので、詳しくは本を買うなり借りるなりで、なんとかして下さい（笑）。

最後に「ポジティブは免疫力を高める」とも書いてありましたので、皆さん人生を楽しむ心を忘れずに長生きしましょう！

それでは皆さんの健康を願いまして、来月のリレー随筆は「藤木さん、記事に困る！の巻」お楽しみに！



各地区港湾コラム⑬ ～鹿児島港湾～

鹿児島港は、広大な静穏水域や変化に富んだ海岸線など優れた自然資源を有する錦江湾に囲まれ、眼前には雄大な桜島がそびえ立ち、背後には「東洋のナポリ」と称される鹿児島市の市街地が隣接する自然景観、歴史、文化に恵まれた港湾であり、国内外の観光船の寄港地としても利用されています。

鹿児島港の歴史は古く、一三四一年頃、島津家五代目貞久が鹿児島に薩摩統治の拠点を移したときに始まるといわれています。

当時の港は草木が繁茂する海岸に過ぎず、現在の鹿児島市街地の大半は海でした。それから約二六〇年後の一六〇二年に島津家一八代家久が鶴丸城を築いて鹿児島に居を構えてから、次第に城下町としての様相を呈し、これに加えて港の整備が進められたと伝えられています。

薩摩藩の玄関口である鹿児島港では、江戸時代から海外との交易が盛んに行われていました。幕府による鎖国政策が確立し、出島以外の場所では外国との貿易ができなくなってからも、島津家は琉球を通じて中国との貿易を継続することができました。その拠点となったのが鹿児島港でした。

江戸時代中期以降、琉球・奄美貿易が盛んになるにつれ、入港船も多くなり、屋久島岸岐、新波止等が建設され、港として機能が整えられてきました。

そしてこれらの岸岐や波止場は幕末になると台場として軍事施設としても利用され鹿児島港の歴史で特筆されることとして、実際に外国艦船との砲撃戦を経験した数少ない港です。一八六二年、生麦事件に端をなした薩英戦争では、鹿児島港は砲撃戦の舞台となりました。中でも、「新波止」は幕末期には一七門を備え、薩英戦争の際には、主力砲台として英国艦隊との砲撃戦を行ったといわれています。それら薩摩藩の中には大山巌、東郷平八郎など若き日の姿もありました。

明治時代に入り、大阪と鹿児島間の定期航路も開設され、さらに日露戦争が終わると、沖縄・台湾方面と阪神各地との物流の中継拠点として貨客の集散が著しく増加するとともに船舶も大型化し港湾の整備がすすめられ、明治四十年十月には「重要港湾」の指定を受けました。

現在、鹿児島港は、鹿児島市の北から南へ約二十キロメートルの範囲に及び、七つの港区から成り立っています。

この七つの港区は種子島、屋久島、奄美大島などの離島や沖縄、大隅半島との定期船のターミナルとして、また地域経済を支える生活物資の流通基地、あるいは漁業・レクレーションなどの活動の場として、地域の発展に大きな役割を果たしています。

しかし、港を取り巻く環境は国際化、都市化、情報化、自動化などの社会経済情勢の進展に伴い大きく変化してきています。働く私たちも、世代が変化し考え方も変わってきています。今は当たり前になっている様々な権利は、先輩方が労働環境改善のために交渉、運動し、勝ち取ってくれました。新しい元号も始まり、時代が変わっていくのかもしれませんが、魅力ある港湾労働のため、運動を継承して参ります。

（鹿児島港湾・中村事務局長）